『紫式部日記』から見る、紫式部と藤原道長の関係について

藤瀬　康子
（山本淳子ゼミ）

一、はじめに

『源氏物語』の作者としても有名である紫式部と、紫式部が出仕していた彰子の父親である藤原道長は実は関係があったのではないかと言われている。その真相は未だ謎であるが、なぜそのように言われるようになったのか。現に室町時代に書かれた『尊卑分脈』には、紫式部のことは「御堂関白道長妾云々」と表記されている。これは『紫式部日記』の中に書かれた、紫式部と藤原道長のやり取りに基づいて表記されたものだと言われている。そこで、その『紫式部日記』を更に深く読み解いていけば、紫式部と藤原道長の関係について新たなことが分かるのではないかと考え、この卒業論文では『紫式部日記』に基づいて、未だに解明されていない紫式部と藤原道長の関係について述べていくことにする。また、この論文では紫式部と藤原道長は関係があったものとし、それを証明していく形で進めていくことにする。

二、紫式部と藤原道長の関係があると考える理由

前章でも述べた通りであるが私自身、式部と道長は何かしら関係があったものと考えている。私がそのように考えるのは、理由が三つあるからだ。

① 紫式部には藤原道長からの誘いを断る理由がない
② 『紫式部日記』の中に残された、紫式部と藤原道長のやり取り
③ 『紫式部日記』の中に残された、紫式部と正妻・源倫子のやり取り

この三つの理由をなぜそう考えるのか、次の章から『紫式部日記』の中より考えていくことにする。

三、紫式部には藤原道長からの誘いを断る理由がない

当時は、高貴な男性と浮名を流すということは、女房にとって不名誉なことではなく、むしろ誇れることであった。そもそも宮仕えとは、主家の男性にとっても女房にとっても色事が起こりやすい環境であったのだ。その根拠ともなりうる箇所が『紫式部日記』の中にもある。寛弘五年十二月二十九日の記事で、以下の部分に見られる。

夜いたう更けにけり。御物忌におはしましければ、御前にも参らず、心細くてうち臥したるに、前なる人々の、
「内裏わたりはなほいと気配異なりけり。里にては、いまは寝なましものを、さもいざとき履のしげさかな」
と、色めかしく言ひゐたるを聞く。
（『紫式部日記』寛弘五年十二月二十九日）

これは、女房たちが「家じゃ今頃は眠っている時間なのに、内裏は違って殿方の靴音がひっきりなしで寝付けない」と言っている場面である。足音が聞こえるのは未だしも、寝付けないほどであるということは、内裏には多くの男性が行き来していたことが窺える。よって、主家の男性にとっても女房にとっても色事が起こりやすい環境であったであったということが分かるだろう。また、式部には夫である藤原宣孝が居たが、式部が彰子に出仕する前に亡くなっているのである。まさに式部には、道長からの誘いがあっても、それを拒む理由が全くないと言っても過言ではないのだ。福家俊幸氏も自身の論文で「作者（紫式部）が道長の求

愛を現実生活の中で拒まなければならなかった理由は見当たらないといってもよい」[1] と述べているし、式部が道長を拒む理由がないことは確実だと言える。やはり誘いを拒む理由がないことは、二人の関係が発展していく大きな理由になるのではないかと私は考えている。このことから、式部と道長の関係があった理由となるだろう。

四、『紫式部日記』の中に残された、紫式部と藤原道長のやり取り

『紫式部日記』の中で道長が登場する場面は多くあり、ほぼ全体にわたって登場している。その中でも、私が式部と道長の関係と関わりのあると考える箇所三つを挙げ、それがどのように二人の交情に関係あるのかを述べていく。

① 渡殿の戸口の局に見いだせば、ほのうち霧りたる朝の、露もまだおちぬに、殿ありかせ給ひて、御随身めして、遣水はらはせ給ふ。橋の南なる女郎花の、いみじうさかりなるを一枝をらせ給ひて、几帳のかみよりさしのぞかせ給へり。

御さまのいとはづかしげなるに、我が朝顔のおもひしらるれば、

「これ、おそくてはわろからむ」

とのたまはするにことつけて、硯のもとによりぬ。

女郎花　さかりの色を　みるからに　露の分きける　身こそしらるれ

「あな疾」

と、ほほゑみて、硯めしいづ。

白露は　分きてもおかじ　女郎花　心からにや　色の染むらむ

（『紫式部日記』寛弘五年八月）

これは式部が局から外を見ていると、朝早くから庭の遣水のごみを払わせている道長の姿が目に入る。式部に気付いた道長が、咲いている女郎花を一枝折り、和歌を投げ掛けた。その和歌に式部が答える、という場面である。この場面の和歌のやり取りに関して、竹内秀男氏は自身の論文[2]で、式部と道長は『後撰和歌集』巻第六秋中に見える藤原師輔と大輔との贈答歌を踏まえたのではないかと述べている。その古歌とは以下の歌である。

をりてみる　袖さへぬるゝ　をみなへし　露けきものと　いまやしるらん

（右大臣九条・巻六秋中　281）

返し

よろつよに　かゝらむ露を　をみなへし　なにをもふとか　またきぬるらん

（大輔・巻六秋中　282）

又は

をきあかす　つゆのよなよな　へにけれは　またきぬるとも　おもはさりけり

（右大臣・巻六秋中　283）

返し

いまはゝや　うちとけぬへき　しらつゆの　心をくまて　よをやへにける

（大輔・巻六秋中　284）

『後撰和歌集』の「秋中」に収められているものの、これらの贈答歌は藤原師輔と大輔、二人の恋愛関係の問題を含んでいる、というのである。竹内氏の説から考えると、式部も道長も才のある人物であるから、この古歌の背景を踏まえて「女郎花―」「白露は―」の和歌をやりとりしたと考えられなくないであろう。このことからこの和歌のやり取りの箇所から、式部と道長に関係があったのではないかと考えられる。

② 源氏の物語、御前にあるを、殿の御覧じて、例の、すずろ言ども出できたるついでに、梅の下にしかれたる紙に書かせたまへる、

すき物と　名にしたてれば　みる人の　をらですぐるは　あらじとぞおもふ

たまはせたれば、

人にまだ　をられぬものを　たれかこの　すきものぞとは　口ならしけむ

めざましう」
と聞こゆ。
（『紫式部日記』年月日不明記事）

この場面は、中宮の御前に置かれた『源氏物語』を見た道長が、『源氏物語』の作者である式部に対して詠んだ歌に式部が返歌を述べる、という場面である。この場面でも注目すべき箇所は「すき物―」「人はまだ―」の和歌である。まずはこの贈答歌の解釈であるが、口訳は以下の通りである。

（梅の実は酸いものだと誰でも知っているから、これだけ熟していれば、手折らずに通りすぎるものはあるまい―あなたは色の道のわけ知りだと有名な人だから、あなたに会って誘いの手をさしのべない人はありますまい）

（酸っぱい梅の実はとても始終口にすることはできないように、私は誰にも誘惑されたことはありませんのに、一体誰がそんな好き者だなんて評判を立てたのでしょう）

「すき物―」の歌であるが、「すき物」には「酸き物」と「好き者」とがかけられていて、「をらで」には、梅の実のついた枝を手折ることと、男性が女性を誘惑することとがかけられている和歌になっている。この歌について萩谷朴氏は『紫式部日記全注釈』で、道長が式部に対して、恋人の有無を打診した歌だと言っている。『源氏物語』の著者である式部をその道の達人、好き者と考える世間の評判を前提として、夫宣孝と長保三年四月二十五日に死別してから、寛弘五年五月まで、七年余にわたって後家を立てとおしている式部に、一人や二人の恋人がいないはずがないと考えた道長が、この和歌でまずは恋人の有無を打診したのであると述べている。この道長の歌に対して式部は、「私はまだ誰にも折られていないのに、誰がこのように「すきもの」などと言い立てたのでしょう」と道長をたしなめるような歌を返している。また、贄裕子氏はこの「すき物と―」の歌に関して、「「をらで過ぐ」という言葉使いから想い起こされる『源氏物語』の夕顔巻を踏まえて歌の後半を解釈すれば、「光源氏が六条御息所邸からの朝帰りの折、御息所の女房の中将の君に対しても、「隅の間の高欄にしばしひき据ゑ」（夕顔①一四七～一四八頁）て「折らで過ぎうき」と歌いかけ手をとらえたように、あなたを手折らないで行き過ぎる人はいないだろうと思います。私も光源氏のまねをしてみたいものです」となろうか。」[3] と言っている。萩谷氏の述べていることからも、贄氏の論文の中からも、式部の気持ちを読み取るのは難しいが、道長は式部に対して気があることが窺えるのではないだろうか。もし道長が式部に気がないとするならば、式部へ恋人の打診をしたりする必要もないし、このように誘うような歌を式部に詠みかけるとは考えにくい。よって、この箇所も『紫式部日記』から二人の関係を考える上で重要な箇所であると言える。

③　渡殿に寝たる夜、「戸をたたく人あり」と聞けど、おそろしさに、音もせで明かしたるつとめて、

夜もすがら　水鶏よりけに　なくなくぞ　真木の戸口に　たたきわびつる

返し、

ただならじ　とばかりたたく　水鶏ゆゑ　あけてはいかに　くやしからまし
（『紫式部日記』年月日不明記事）

この場面は、式部が寝ている局の戸を夜に誰かが叩く音が聞こえ、怯えて夜を明かすと朝にこのような和歌が届いた、という場面であり、前述した②の後に続くものでもある。また、最初の章段で挙げた『尊卑分脈』は『紫式部日記』のこの箇所を見て、式部を「御堂関白道長妾云々」と記述したと言われているのである。私自身の中でも、式部と道長は関係があったと考えるに至ったきっかけの箇所でもある。

まず、この場面で詠まれている贈答歌は主語が省かれているが、これは一般に道長と式部の贈答歌とされている。その理由は『新勅撰集』で道長の歌とされているからだ。また、『紫式部日記絵巻』にもこの場面の絵が描かれていて、その絵は道長が式部の局を訪れている絵になっている。そのような絵が描かれているのは、この歌が道長と式部のものであるという確信があってのものであろう。よって戸を叩いた人物が道長であることが分かる。

さて、ここで疑問に思うことが二つある。

一つめは、式部が『紫式部日記』にこのような、二人に関係があったのではないかとにおわせるやり取りを載せた意図である。このことを考えるにはまず、『紫式部日記』が書かれた理由を考えていかなければならないだろう。しかし、『紫式部日記』が書かれた本当の理由は未だ分かっていない。『紫式部日記』が書かれた理由は諸説あり、深町健一郎氏は「主家の繁栄を記録するという公的な職務」[4]と述べている。また、福家俊幸氏は「『日記』執筆を依頼した、いわばスポンサーであったとすれば、そのスポンサーを風雅なやりとりを通して物語世界の貴公子のように理想化して位置づけていたということであろう」[1]と自身の論文に書いており、道長が『紫式部日記』を式部に書かせた、と言っている。贄裕子氏[3]はこのやり取り自体を後宮政策の一環であり、この贈答歌のやり取りも道長の演出と述べている。このように見てみると、『紫式部日記』は公的文書という考えが一般的には多いようである。しかしもし、『紫式部日記』が深町氏の述べるように、公的な職務を目的で書かれたのであるとすれば、そのような公的な文書に右記のようなやり取りを載せるだろうか。公的な文書ということは、多くの人の目にとまるものでもあり、このような私的な内容は書かないのではないか、と私は考える。「夜もすがら―」「ただならじ―」の一連のやり取りを載せたということは、式部自身にも道長から誘いを受けたことを誇りに思う一面があり、このような文書にも残したのではないかとも考えられる。萩谷朴氏も『紫式部日記全注釈』で「むしろ道長ほどの人物から求愛されたということは、誇るべき事実として、どこかに記録しておきたい気持が抑えきれなかったのであろう」と述べている。また、福家氏や贄氏が言うように『紫式部日記』が道長の後宮政策の為に道長の命令で書かれた、という説であるが、この説に則って式部が道長の才を記そうとこの場面を書いたとすれば、別の和歌でも良かっただろうし、このような式部が道長から誘いを受けるというような場面でなくても良かったのではないか、と私は考える。それに、道長もこのような演出でなくても良かったはずである。

さらに、この場面から考えられる疑問のもう一つは、何も関係のない女性の局を夜に男性が訪れたりするのだろうか、ということである。当時の風習から考えるとただ訪れてみただけと考えるのは難しい。式部は分からないが、少なくとも道長には式部に対して何らかの気持ちがあり、夜に式部の局を訪れたのではないだろうか。式部もこの場面では断っているが、後日はどうなったかは分からないし、『紫式部日記』にも記述はない。関係がなかったと断言するのは難しい気もする。

以上が『紫式部日記』の中に残された、紫式部と藤原道長のやり取りの中で式部と道長の関係に関わりがあるのではないかと考えられる箇所である。書かれた本当の理由は謎なままだが、『紫式部日記』に書かれた文書は式部が実際に書いたものであるから、何よりも説得力があるし、真意は何であるにしろこのようなやり取りが式部と道長の間で行われていたのは事実である。私は、この三箇所を見て関係があったと言えると思うし、逆に関係がなかったと言い切る方が難しいと考える。

五、『紫式部日記』の中に残された、紫式部と正妻・源倫子のやり取り

『紫式部日記』を読み込んでいく中で、式部と道長の関係を考えていくには道長の正妻でもある源倫子と式部の関係も重要であることが分かってきた。式部と道長ほど多くのやり取りは残されていないが、式部と倫子のやり取りも『紫式部日記』の中に何カ所か存在する。その中でも、式部と道長の関係を考えるにあたって関係の深い箇所を三カ所述べて、考えていくことにする。

① 九日、菊の綿を兵部のおもとの持て来て、
「これ、殿の上の、とりわきて。『いとよう老い拭ひ捨て給へ』と、のたまはせつる」
とあれば、
菊の露　わかゆばかりに　袖ふれて　花のあるじに　千代はゆづらむ
とて、かへしたてまつらむとする程に、
「あなたに帰りわたらせたまひぬ」

とあれば、用なさにとどめつ。

（『紫式部日記』寛弘五年九月九日）

この記事は九月九日に書かれたものであり、九月九日は「重陽の節句」である。「重陽の節句」とは菊酒を飲んだり、前の晩から菊の花の上に綿を置いて露を含ませ、それで顔や体をふいて若返りを願う、老いを捨てる、という風習のことである。倫子はその菊の露を含ませた綿を「うんと念入りに老いを拭き取りなさい」と言って式部に贈った。そんな倫子に対して式部は「私はたいして年寄りではございませんから、ほんのちょっと若返るといった程度に袖を触れて、この菊の露と、露がもたらす千年もの寿命は、花の持ち主のあなた様にお譲り申しましょう」と返した、という場面である。自分の夫と式部に関係があると考えた倫子が、嫉妬して菊の露を含ませた綿を贈った、と解釈されている。しかし当時は一夫多妻が常識の世の中であり、愛人などという存在があったことは珍しくない。それどころか、よくあるものでもあった。だが、その中でなぜ倫子は式部を敵視したのだろうか。式部に対して倫子はむやみに嫉妬したわけではなく、このように嫉妬するには三つの理由があると、萩谷朴氏は『紫式部日記全注釈』で述べている。

一つめは「式部の身分の低さ」である。式部は倫子の母方と同じ北家藤原氏良門流の再従姉妹。式部の夫である宣孝もまた、倫子と再従兄妹の関係にあるとはいっても、今では家司階級・受領階級として摂関大臣家に臣従する低い家柄。また、式部の父の為時は、昇殿をゆるされない散位の五位にしかすぎなかった。このことが、倫子のプライドを傷つけるのである。

二つめは「式部の年齢」である。一夫多妻の貴族社会において権力者の妻室は、自分が女性としての魅力を喪失してしまうような年齢に達した時には、妻としての権力の座を保持するために、親族や侍女のような自己の身内の若い女性を側妾として夫に勧めるような習わしがあった。夫である道長の交情を黙認しなければならない倫子であったが、さほど年齢差のない式部に対しては許すことが出来なかったのだ。式部はおそらく寛弘五年当時三十五歳であったと推定され、確かに四十三歳の道長に対して四十五歳の倫子よりはふさわしい年齢であったかもしれないが、新しく情人として取り上げるには、式部の年齢はいきすぎていたのである。特に式部を名指しして菊の露を含ませた綿を贈った倫子の真意は、実はそこにあったのであろう。

三つめは「式部の教養才能」である。『源氏物語』の作者として、世間に定評のある式部の教養才能が、倫子にとってはまばゆくも目ざわりだったのだ。もちろん、その学才の故にこそ、式部を中宮彰子の教養係として召しいだすことに自分も賛成したのであろうが、今はそれが仇となって、夫道長の興味をそそり、嫉妬の苦汁をなめさせられることとなってしまったのだ。

以上の三つが倫子が式部に対して嫉妬する理由である。

またそんな倫子に対して、式部はどんな反応をしたのか。式部が菊の露を含ませた綿を贈ってきた倫子に対して「菊の露―」という歌を返したことにも、自分も三十路を越えているとはいえ、男性に対する魅力を失っていない、という式部の自信からその歌を贈ったとも考えられる。この式部の自信はやはり、道長から言い寄られていることからきているのではないかとも考えることも出来るのではないだろうか。

② おそろしかるべき夜の御酔ひなめりとみて、ことはつるままに、宰相の君にいひあはせて、東面に殿の君達・宰相の宰相の中将など入りて、さわがしかれば、ふたり御帳のうしろに居かくれたるを、とりはらはせ給ひて、ふたりながらとらへ据ゑさせ給へり。

「和歌ひとつつかうまつれ。さらばゆるさむ」

とのたまはす。いとわびしくおそろしければ、聞こゆ。

いかにいかが　かぞへやるべき　やちとせの　あまり久しき
君が御代をば

「あはれ、つかうまつれるかな」

と、二たびばかり誦ぜさせ給ひて、いととうのたまはせたる、

あしたづの　よはひしあらば　きみが代の　千とせのかずも
かぞへとりてむ

さばかり酔ひたまへる御心ちにも、おぼしけることのさまなれば、

いとあはれにことわりなり。げに、かくもてはやしきこえ給ふにこそは、よろづのかざりもまさらせたまふめれ。千代もあくまじき御ゆくすゑの、数ならぬ心ちにだに、思ひつづけらる。

「宮の御前、きこしめすや。つかうまつれり」

とわれぼめし給ひて、

「宮の御父にてまろわろからず。まろがむすめにて宮わろくおはしまさず。母も又、さいはひありと思ひて、わらひ給ふめり。よい夫は持たりかしとおもひたんめり」

と、たはぶれきこえ給ふも、こよなき御酔ひのまぎれなりとみゆ。さることもなければ、さわがしき心ちはしながら、めでたくのみ聞きゐさせ給ふ。殿の上、聞きにくしとおぼすにや、わたらせ給ひぬる気しきなれば、

「おくりせずとて、母うらみたまはむものぞ」

とて、いそぎて御帳のうちをとほらせ給ふ。

「宮、なめしとおぼすらむ。親のあればこそ子もかしこけれ」

と、うちつぶやきたまふを、人人わらひきこゆ。

（『紫式部日記』寛弘五年十一月一日）

これは敦成親王のお誕生五十日の祝いの場面である。式部は宰相の君と申し合わせて早々に退散するつもりが、道長に捕まってしまい歌を詠まされる。式部の歌に対して、道長はすっかり酔っているにも関わらず「あしたづの―」という歌を詠み、その歌から道長にとって、若君の誕生はずっと念願であったということが窺える、という場面である。しかし、この場面にはそれだけではなく、倫子が不機嫌な箇所も窺えるのだ。そしてその箇所が、道長を巡っての式部と倫子の関係を示す部分でもある。その箇所とは、傍線部の「聞きにくしとおぼすにや」の箇所である。これは道長の「中宮のお父様だから私はご機嫌だ。私の娘だから中宮もご機嫌でいらっしゃる。お母さんこれがまた、しあわせだと思って、ここにこしていらっしゃるようよ。立派な旦那さんを持ったものだと思ってるだろう」という冗談に対して、倫子が聞くに堪えないと思い向こうへ行ってしまったという内容だ。これだけでは、道長を巡った式部と倫子の関係どころか、式部はこの箇所とまったく関係ないようにも見える。しかしこの箇所から、倫子が式部を敵視している様子が窺えるのだ。これは最初に述べた通り、敦成親王のお誕生五十日の祝いの席の日記である。にこにこ笑っていなければならないお祝いの席を、四十五歳で分別も十分にわきまえている倫子が、席を立って行ってしまうはずがないのである。さらにもし、これが親娘三人の席であったら、道長の自慢話は、倫子にとっても聞くに堪えないものではなく、共に楽しいものであったに違いない。かりに周囲に侍女たちが居て、見ていたとしても、倫子は気をつかったり、恥ずかしがったりするほどの年齢でもなければ、そのような身分でもないのである。ではなぜ、倫子は席を立っていってしまったのか。この理由に道長を巡った式部と倫子の関係が関わってくるのではないかと考えられる。『紫式部日記』の記事であるのだから勿論、式部も参加していた。やはりこの祝いの席に式部が同席していて、その式部が道長と関係があることに、倫子が既にそのことを感づいていればこその出来事だったと言えるだろう。

③　それ、「心よりほかのわが面影を恥づ」と見れど、えさらずさし向かひ、まじりゐたることだにあり。「しかじかさへ、もどかれじ」と、恥づかしきにあらねど、「むつかし」と思ひて、呆け痴れたる人に、いとどなりはてて侍れば、

「かうは推しはからざりき。いと艶に、恥づかしく、人見えにくげに、そばそばしきさまして、物語このみ、よしめき、歌がちに、人を人とも思はず、妬げに、見おとさむものとなむ、みな人人云ひ思ひつつ憎みしを、見るには、あやしきまでおいらかに、こと人かとなむおぼゆる」

とぞ、みな云ひ侍るに恥づかしく、「人にかうおいらけものと見おとされにける」とは思ひ侍れど、ただ「これぞわが心」と、慣らひもてなし侍るありさま、宮の御前も、

「いとうちとけては見えじとなむ思ひしかど、人よりけにむつましうなりにたるこそ」

と、のたまはするをりをり侍り。

くせぐせしく、やさしだち、恥ぢられ奉る人にも、そばめだてられで侍らまし。

（『紫式部日記』年月日不明記事）

誰からも声をかけてもらえなかった初出仕から、式部は傷つかない為に馬鹿で間抜けな人間を演じてきていた。ところがそれが功を奏し、同僚皆が式部を見る目を変えた。「気取り屋で人を見下すような人」という式部のイメージを払拭したのだ。そのことを知った式部は気恥ずかしく感じた。うるさ型をかわす為に馬鹿で間抜けな人間を演じてきていたからだ。そこで式部は、穏やかであるというのを自分の本性にしようと、自分を変える努力をし、距離を置かれていた中宮彰子にも心を開いてもらえるようになった、という内容の日記である。実際の出来事などと関係がある箇所ではなく、一見論文のテーマとも関係がない箇所にも見えるが、この部分からは、今までの倫子の態度に対して、傍線部の「くせぐせしく、やさしだち、恥ぢられ奉る人」の箇所に式部の皮肉が垣間見えるのである。

まず、主語が省かれている「くせぐせしく、やさしだち、恥ぢられ奉る人」であるが、これは本当に倫子のことであるのかどうかを証明しなくてはならない。萩谷朴氏は『紫式部日記全注釈』でこのように解釈している。「くせぐせし」「やさしだつ」「恥ぢらる」それも、最後の「恥づ」を、前文の式部に関する前評判におけると同様、気のおける、気骨の折れる、気がねせられるという意味の悪評と見るべきであるから、これだけの三条件を備えた女性は、式部に優るとも劣らぬ相当な煩さ型の人物であったといえる。よって、この人物が何びとであるかを推定する条件が四つ挙げられるのである。

（1）「くせぐせし」という形容詞が「一癖ある」「ひねくれている」という意味であること

（2）「やさしだつ」という自動詞が「上品ぶる」という意味であること

（3）「奉る」という最高敬語の助動詞を使用する必要のあるほど高貴な身分の人から「恥ぢられ」ている、すなわち一目おかれている

（4）式部も、この人に「そばめだてられ」ることを怖れていた

この四つの条件を満たす人物が他の誰でもなく、倫子であるのだ。中宮彰子を中心として中宮女房の人性論を展開している『紫式部日記』において、「奉る」という対象尊敬語に最もふさわしい人物は中宮であると仮定出来る。その中宮よりは下臈者であって、しかも、式部がその人から睨まれることを危惧しているほどの上位者であり、かつ、「くせぐせし」「やさしだつ」「恥ぢられ奉る」という性格上の三条件を満たす人物となると、それは中宮の母倫子を推定するより他ない。古参上臈の女房の中にも、中宮が一目置かねばならないようなすぐれた女性がいたかもしれない。しかし、これまで式部が『紫式部日記』の中で批評してきた限りの実在人物の範囲内においては誰一人、前に述べた四つの条件をすべて満たす人物を見いだせないのだ。中宮が否応なしに一目置かなければならない人物は、道長・倫子・一条天皇の三人であるが、一条天皇は中宮より下臈者ではなく、道長は男性であるから（2）の「やさしだち」が妥当しないし、式部を（4）「そばめだつ」こともないだろう。そうすると残るところは倫子一人である。前の①②からでも、式部が倫子の目を最も怖れていたであろうことが分かる。

このように式部が倫子のことを「個性が強くて」や「お上品ぶって」と皮肉たっぷりでいやみのように『紫式部日記』の中で記述した理由はやはり、式部と道長に関係があり、それに気付いた倫子が嫉妬から、式部へ嫌がらせのようなものを行っていたという事実があったからだと考えられるであろう。また、同時に①②が道長を巡っての倫子の嫉妬であることを証明することにもなるのではないだろうか。

六、最後に

以上のように『紫式部日記』の中から式部と道長の関係を考えてきたが、関係があったということが『紫式部日記』の中から窺い知ることが出来たであろう。この卒業論文を書き進めていく中で、式部と道長に関係があったということは、私の中でより確信を得るものになってきた。しかし、なぜ式部は道長と関係を持つようになったのかという疑問がよぎった。式部が亡くなってしまっている現在、この理由を聞くことは出来ないし、『紫式部日記』の中にもそれを示唆する記述はない。そこで

この論文の最後に、論文を書いていくなかで考えた、式部が道長と関係を持った理由を述べることにする。

一つは、女性は権力者にはなれないという当時、式部は権力者である道長に愛された、ということで社会的な証、その時代に生きていたという証拠を見出そうとしたのではないか、ということである。式部は中宮彰子の女房であり、道長には近づきやすい環境でもあっただろう。才を持った人物が近くに居て、道長も放っておくはずがない。当時の権力者である男性に愛されることで、式部は自分の存在の証を見出していたのではないだろうか。

二つめは、名を残している女性の少ない歴史の中で、式部の名前が今も尚残っているのはなぜか、というところに着目して考えてみた。勿論、『源氏物語』の作者であるから名前が残っているのは間違いないだろう。しかし他にも理由があって、それは式部が権力者である道長の妾であったからではないか、というものである。淀君も豊臣秀吉の妾であったから名前が残っていると聞いている。このようなことでもなければ、女性は名前を残すことが出来ない時代でもあったのだから、考えられなくもないだろう。また、自分に才能があると確信した式部が、権力のある道長を利用したようにも考えられる。

このように式部と道長に関係があったのはなぜかという理由を考えていると、二人に関係があることは、式部にとっても道長にとってもデメリットはないことが分かってきた。関係があったと言われている理由はそれであるような気もする。むしろ、式部は現代に名を残すことができ、道長は自分の娘の彰子を一条天皇と結婚させることができて二人の間に男の子が誕生してめでたく野望を叶えることができている。デメリットどころかメリットがあるような気もする。二人の関係は、お互いに惹かれ合ったというようなロマンチックなものではなく、互いのいろんな考えが入り交じったものであったのだろう。それにはやはり、儚さや虚しさも感じるが、当時は男女の関係などは、互いの他の欲を満たす為の政略の一つ、道具でしかなかったということを改めて感じるものになった。

[注]

本文、口訳の引用は全て、萩谷朴氏『紫式部日記全注釈』上下（角川書店）による。

（1）福家俊幸「『紫式部日記』道長描写の方法」（『早稲田大学教育学部学術研究（国語・国文学編）』第五十四号　平成十八年二月）

（2）竹内秀男「『紫式部日記』論―紫式部と藤原道長との間における「女郎花」「白露は」の贈答歌に関して―」（『日本文学研究』二二号　昭和五八年一月）

（3）贄裕子「読む　道長と紫式部の贈答歌―『紫式部日記』―」（『日本文学』六十巻九号　平成二十三年九月）

（4）深町健一郎「『紫式部日記』小考―道長描写をめぐる覚書―」（『早稲田大学教育学部学術研究（国語・国文学編）』第三十四号　昭和六十年十二月）